運動遊びにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助
（2）ボールとの関わり

幼児教育教室　村　岡　眞　澄

＜研究目的＞

運動的な遊びでの幼児の育ちを追求する場合にも、単に身体的運動的な発達の側面だけでなく、他の様々な側面の発達を視野に入れる必要があることはすでに指摘されている通りである。

筆者は、基本的にこのような認識を基底にして、運動的な場での幼児の育ちを追求してきている[1)2)]。しかし近年、地域での子どもの遊び集団の崩壊、遊びモデルの不在など様々な原因により、集団的な遊びを楽しむことが次第に難しくなっており、まず遊びを十分に楽しむこと、つまり低下しつつある子ども達の遊ぶ力を回復することが求められる。遊ぶ力の低下は、子どもたちの生活の存り様と密接な関連をもっているので、その根本的な解決に向けての努力が必要であることは言うまでもないが、子どもたちがもっている知識や技能を遊びの技術に転化する遊び意識[3)]（メタメッセージ）を育てるなど、具体的に遊びを展開し楽しむ力を育てることが急務となっていると思われる。

集団的な遊びにおける遊び意識形成への働きかけは、遊びの構造的把握に基づいて、幼児一人ひとりの遊びの楽しさの追求と同時に、子ども同士が楽しさを分かち合ったり、共通の楽しさを見つけるプロセスへの援助として理解されるであろう。

本研究では、このような立場から、運動的な遊びの一つであるボール遊びを取り上げ、ボールに関わっての遊び意識が加齢にともなってどのように変化するのか、また、それをふまえて、遊び意識を育てるための指導・援助のあり方について考察したい。幼児のボール遊びに関する先行研究には、ボール操作能力の発達やボールを使って予測能力の発達を明らかにしたもの、[4)5)6)7)8)]投パフォーマンスの性差を明らかにしたもの[9)]などがみられる。その中で、飯田らの応答的環境の探究という目的でボールと幼児との関わりの変化を追跡した研究[10)]や河邉ら[11)]の研究は、本研究に示唆的である。

さらに、「マーク・ジョンソン（Mark Johnson　心のなかの身体　1987）[12)]は直観の基体として身体を重視したフレーベルの論を想像力論の枠組みで読み代え、身体経験が知覚や認識の基礎を形成すると提唱した」とする金光[13)]の論は、運動的な遊びが幼児にとってもつ意味、換言すれば「ボール遊びで何が育つか」を明らかにする上で示唆するものが多い。したがって、この点についても言及したい。

＜研究方法＞

1、園での遊びの観察および実践事例や文献から分析、考察する。

2、観察園：愛知県知立市内の保育園および刈谷市内の幼稚園

3、観察期間：１９９６年９月～１２月

＜結果と考察＞

1、ボール遊びでの遊び意識の年齢別様相

1）０歳～１歳児のボール遊び

事例１　　ボールまてまてえー！！　　０歳児　12月

「ホールへいくよ。おいで」と呼ぶと保育者をめざして這ってくる子ども達です。

♪ひとなげふたなげーとうたいながら、ボールを出すとおいかけていく元くん。ボールを4個出したところで、保育者が1個のボールを転し、マテマテーとおいかけはじめると、樹里ちやんもやってきて、2人ともケタケタ笑ってボールを追いかけはじめます。ボールを両手に持ってボンと投げ、転っていくのをまた追いかける事を繰り返して遊ぶ元くん。樹里ちゃんは両手にボールを持って座りこんでいたので「樹里ちやんボールぽーんしてごらん」と動作を入れ働きかけると、ボールを手から離しました。ボールがあまり転がらず、樹里ちやんも座っていたので、保育者が転がしママテマテと追いかけてみました。樹里ちやんは様子をニコニコして見ています。「樹里ちやんいくよー！！」とボールを見せ、転がすと樹里ちゃんの前を通りぬけていきました。すると、ボールをめがけてスピードを出しおいかけていく樹里ちやん。豊くんは、ボールを少しおいかけては、くるりと向きをかえ、つかまり立ちができるところへ這っていって立っています。そんな豊くんを、つかまり立ちができないところへ戻しては、這う働きかけをしてきました。ボール遊びはそばについて遊ばないと、なかなか要求にならなかった豊くんです。優香ちゃんはボールに慣れないので、保育者が動くと泣いてしまいます。保育者がボールを持って「優香ちゃんおいで」と呼ぶと這ってきました。ボールを両手にかかえこんで、手からボールがはなれるとおいかけていました。（育ちあうほいく　愛知県　小規模保育所連合会　１９８９）

事例２　　１歳児　　１１月

Ｔ子はピンク色のカラーボールを持って、「Ｍちゃんと同じ、Ｍちゃんと同じ」と好きなＭ子と同じボールを持っているのが嬉しいらしく保育者に何度も言いに来る。保「よかったね」

Ａ夫は遊戯室の舞台の上からボールを下に放り投げ、それを取りに行くことを繰り返していたが、Ｋ男にボールをとられて泣く。Ｃ子はそれを見て、自分のボールをＡ夫に渡して慰める。歩くのがやっとのＦ美はボールに無関心だが、早生まれで運動能力の優れたＭ子は、「アラヨアラヨ」と嬉しそうに言いながら、ボールを自分で蹴っては追いかける。数人の子が、ボールを持って嬉しそうに遊戯室を走り回っている。

０～１歳児の遊び意識

まだ、ボールという明確な意識がみられない。遊具の一つという感覚で、抱えてその感触を楽しんだり、持つこと自体を楽しんでいる。ボールに無関心の子や慣れない子もいる。保育者がボールを転がして追いかけてみせると、それに触発されてボールに関わろうとする。運動面の発達が進ん

でいる子は、ボールを自分で転がしては追いかけたり、舞台の上から放り投げたり、あちこちぶつけてボールがどうなるのかを試したりなど、遊び意識が芽生えてきており、自分なりに楽しんでいる。自分のボールという意識が強く取り合いもみられるが、泣き出したりすると、自分のボールを渡して慰めるなど、相手を思う気持ちも育っている。途中で遊戯室の遊具で遊び始める子もいたが、ほとんどの子どもは１時間近くボール遊びを楽しんだ。

2）２歳児のボール遊び

事例３　１１月

Ａ美は白いフワフワボールが気に入ったのか上に放り上げては、歓声をあげながら拾いにいく。他の子も上にあげる力が１歳児よりも強い。保育者が「ガオガオ」といいながらボール紙でつくった怪獣（下図参照）を出すと、ほとんどの子が自分の持っているボールを怪獣にぶつけたり、上のあいている穴に入れようとする。

なかなか入らないＫ子が保育者に「できないから抱っこして」といい、抱っこしてもらってボールを入れる。それを見ていたＨ子が椅子を自分で持ってきて、椅子の上に乗ってボールを投げる。無関心だったＡ美も抱っこされながら「セーノ！　ソレ」と言って投げ、入ると嬉しそう。

Ｙ男がとても上手に入れるので、保「Ｙちゃんどうやってやるの？上手だね」

Ｙ男「あのねこうやってやるの」と、ジャンプしながらやってみせる。

保「あ、そう。カエルさんみたいにピョンととんでやるだんって」　Ｙ男は入れやすそうな所を探して何回も繰り返していたが、「疲れた」と寝そべり、その後保育者とボールの転がし合いをする。

２歳児の遊び意識

１歳児と基本的にあまりかわらないが、身体的運動的発達にともなって、その関わりに広がりがみられるようになる。また怪獣の穴やバスケットに入れるために、何度も挑戦するなど、ボールに明確な意識をもつようになる。なかなかボールが穴やバスケットに入らない子は、目的を達成するために、椅子をもってきたり、保育者に「抱っこして」と要求するなどボール特有の、広い意味での技能追求、換言すれば自己試しや自己超越の楽しさを追求する姿がみられるようになる。Ｙ男には、保育者とボールのやりとりを楽しむなど、自分とボールの関係だけでなく他者を含めた遊び意識が生まれている。怪獣の穴やバスッケットにボールを入れることに興味をもった子どもは、１時間以上もやり続ける。

3）３歳児のボール遊び

事例４　　１０月

Ａ夫、ボールを上に上げて受けたり、ついたりを何回も繰り返している。うまくつけないので投げたり足で蹴ったりする。Ｂがトンネルをつくると、Ｃがボールを転がす。その時Ｂは楽しそうに笑い、Ｃは「通った通った！」と嬉しそうに言う。

事例５　　９月

ＨがＫに「サッカーやろう」と言って、２人で蹴り合う。ＨはＫの方に蹴ろうとするが、壁の方にあたってしまう。しばらく蹴り合っていたが、うまく蹴り合いにならずやめてしまう。

事例６　　７月

Ｍは園庭の大きな石の上に先生に引っぱり上げてもらい、そこから少し離れた所にあるらせん状の固定遊具に向かってボールを投げる。うまく入るとコロコロと落ちてくるのが楽しいのか、何度も繰り返している。

３歳児の遊び意識

子ども同士の関わり合いがみられるようになり、自分がトンネルになり、他の子がボールを転がす、その時楽しそうに笑うというようなボールをめぐっての遊び意識が出てくる。しかしボールを操作する力がまだ十分でなく、遊びを続けられない。ボールを上に投げて受ける、つく、玉入れをする、遊具へ投げ入れるなどボールへの関わりのレパートリーが増え、力強さが増す。

4）４歳児のボール遊び

事例７　　７月

Ｓが的当てボード（右図　参照）をめがけて新聞紙でつくったボールを投げる。

Ｓ「２点目」　保「２回入ったね」　Ｓは持っていたボールを置いて、小さいボールを２つ持ってくる。　Ｓ「今度は２つね」と言って投げる。　保「惜しい！残念」

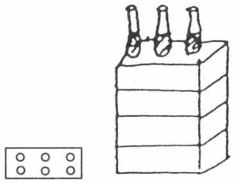
Ｓは次は３つ持ってくる。入ると「３点４点」と教師に言い、次々投げる。

Ｓ「１１の次は？」　保「１２よ」　　Ｓ「１２、１３」と投げる。保「上手ね、簡単に入るようになったね」

Ｓ「僕入れたら何回目？」　保「１４回目」　Ｓ「こんないっぱい次は投げる」と言い、６つ持ってきて投げる。

事例８　　７月

Ｙは、それまで遊んでいたＳやＢ、Ｃがいなくなってから、図のような巧技台の上の的をめがけて投げる。的が５本倒れる。



Ｋ子が的を並べる。Ｍ「難しくてもいいよ」と言い、投げて１本倒す。

Ｍ「これでいいでしょう」と同じように並べる。Ｍが投げて倒す。

Ｋ子「直しておいてよ」　Ｍが笑っていて直さないので、Ｋ子並べる。

Ｍ、また投げて４本落とす。Ｋ子「並べておいてよ」　Ｍ並べる。

Ｋ子、投げて１本倒し、直す。交代で投げながら、図のように的をいろいろに並べる。

事例９　　１０月

Ａ子Ｂ子が大玉を坂の上から転がす。Ｅ美がそれを下で受けとめる。次はＥ美が上から転がし３人が手をつないで受ける。ところが、手をつないでいては玉を受けとめることができず、中の一人が前に飛び出してしまう。徐々に不満がつのり遊びがこわれそうになった。　保「受ける順番を決めたら？」と提案し、保育者も遊びに入る。

すると、どの子も皆玉を受けたり転がしたりすることができるのでとても楽しそうである。玉を受ける時は、足を踏ん張って手を広げ構え「ウン！」と言って受ける。坂を転がして上がる時は、手を上に押し上げるようにして、最初は歩きながら押していたのが、だんだん繰り返すうちにかけるように押す。保育者が抜けた後は、遊びの形が変わり、１人ではなく３～４人で押す姿がみられた。あとで、「みんなで押しちゃったんだねー！」と嬉しそうにいう。

事例１０　　１１月

年長組のドッジボールに加わる。ルールが理解できていないので、ルールに関係なくボールをとりに行ったり、味方に投げたりした。年長児に当てられると平気ではないが、「相手に当てたい」という気持ちから何度当てられても参加。（　才賀　敬　　渡辺弘純　　４歳児のあそび　労働旬報社　１９９４　）[14]

事例１１　　１２月

２人でひとつのボールを相手に向かって投げる。R、Mと、うさぎ組の男の子６～８人が、遊戯室や運動場で、仲間とボールの蹴り合い。年長児のサッカーには保育者が誘うと参加しましたが、年長児との実力の差がありすぎてか、自分たちから入れてもらおうとはしなかった。

得意でない子は、仲間のしているのを見ていても自分からはなかなかボールあそびをしません。保育者が働きかけて、ボールを地面において蹴ることや保育者がボールを高く、遠く蹴り上げて、ボールを拾い合うことからはじめました。（　才賀　敬　　渡辺弘純　　前掲書　）

４歳児の遊び意識

色々な面が発達してくる４歳児では、表１に示したように遊び意識は一段と深化し、ボールに当てられると平気ではないのに、相手に当てたいから我慢するなど自分を試し挑戦する楽しさを追求する姿がみられるようになる。遊びに感じている楽しさは個々それぞれであるが、自分とボールとの関わりの楽しさから、１つのボールをめぐって、互いにやりとりしたり競い合ったりする楽しさを追求するようになる。しかし、まだルールが十分理解できていない、ボールを操作する力が十分でないなどの理由で、ゲームをするとトラブルが生じやすい。その中で、「順番でやる」「ジャンケンで決める」など、トラブル解決に向けて努力する姿がみられるようになる。

5）５歳児のボール遊び

事例１２　　転がしドッジボールをする　　5月

円の中にいるK男にH男がボールを当てる。周りの子は「K男くん当たったよ」と言うが、「え一っ、当たってないよ」とK男。「当たったよ！！　当たったら外へ出やなあかんの」と言われても、「い一の、僕は。3回当たったら出るんやから」と返す。「そんなんずっこいわ、ずるい！！」周りは不満の声を出す。教師も、「K男くん、ボールに当たったら出るのな」と促すと「え一っ、僕当たってへんで、次当たったら出るから」と言う。

何回かボールに当たり、皆から言われた後でK男は外に出る。今度は外から中の子にボールを当てる番である。K男は自分がボールを取りたいあまり、すでにボールを取った子にしがみついていってボールを奪おうとする。見ていた子に「今のは○○くんのボール」と言われる．そう言われても何度も何度も同じ事を繰り返し、K男はボールを取った子にかぶさっていくのである。周りの子は、その度に「今のは○○くんが早かった！！」と言って、K男に対してだんだん怒ってくる。

（東海地区附属幼稚園研究協議会　発表資料　１９９６）

表１　　４歳児の遊び意識

	諸側面	子どもの姿	
ボール遊びの遊び意識	身体面への現われ	・的当てをする ・大玉を転がして坂の上に上げる ・転がってきた大玉を「ウン！」といって足を踏ん張って受け止める ・3～4人で転がす ・走って大玉を転がす	・年長児にボール当てられると平気ではないが、何度当てられても参加する
	誘い・応答・発展など	・的の並べ方を色々変える ・「みんなで押しちゃったんだね」と嬉しそうに言う ・A子B子が大玉を坂の上から転がし、E美がそれを下で受けとめる	・保育者が誘うと参加するが自分たちから入れてもらおうとしない ・6～8人が仲間とボールの蹴り合いをする
	ルール役割分担など	・交代でボールを投げる ・倒した的を直す	・年長組のドッジボールに加わるがルールが理解できない
	トラブルの解決	・保育者の提案で大玉を順番で受ける	

事例１３　　ドッジボール　　１０月

６、７人で始まったドッジボールであるが、楽しそうにやっているのを見て、クラスの大半の子が加わる。ワンバウンドしたボールは当たっても大丈夫というルールが難しいらしく、間違う子も多い。そのつど、保育者が「今のはワンバウンドだからいいんだよ」とルールを確認し子ども達に伝える。外野で、K男とH美がボールの取り合いになりその場に座り込んでしまう。２人のところにみんなが集まる。他の子達が　「H美ちゃんが先にさわったよ」と声をそろえて言う。すると、K男は自分なりに納得したようで、ボールを渡す。ゲームが再開され、一応続いてはいるが、ボールの取り合いによるトラブルが何度も起きる。Nがジャンケンで決めたらと提案したことにより、どちらが先にさわったか分からず判断が難しいような時には、ジャンケンで決めるようになる。

事例１４　　パスボール　　１１月

私の提案に子どもたちは大賛成。気の合う子が多いこともあり、やる気満々で園庭にとびだしていく。
ゴールキーパーは１点交代、または希望者がなる。
第１グループのつよい子同士のゲーム。今まではボールを持つと独走していたが、相手チームも全員素早く動くので、どうしてもパスが必要になってきます。試合が白熱し、見ているほうもおもわずひきこまれる。

第二グループは女の子どうしの対戦。ここぞと言わんばかりに激しいボールの奪い合い。みさちゃんだけではなく、さやかちゃんが、はじめて点を入れてとびあがって喜びます。さきちゃんも自分がもったボールは取り合いになっても離しません。
第三グループもパスしてもつながらず、シュートもよくはずし、とんでもない所へボールがとんでいきます。それでも試合が白熱し、見ているほうものどをからすほどのめりこんで応援するのは、お互いの力が接近していることと、何よりも一人ひとりが熱中し、がむしゃらに行っているからなのでしょう。試合の後、「面白かった！」「楽しかった。もう一回やろうよ」という声が相つぎます。
「ねえ、どこが面白かったの？」「さやかねえ、シュートできたのが、すっごくうれしかった」
「ぼくも、ボールもってビューンて走りまわったのがおもしろかった。」

事例１５　　サッカー遊び　　１２月

園庭でサッカーが好きな５人が、ブラジルから来ているＨを誘ってサッカーをする。Ｈはこれまであまり遊びに誘ってもらえないでいたが、サッカーが上手なことから誘われて参加するようになった。緑チームのＨが蹴る時、相手の白チームは緊張し、しっかり構えて待つ。両チームの力はだいたい互角で、お互いにあまり勝敗にこだわらずに攻防を楽しんでいる。コートの横に自分達で作った点数表が置いてあって使ってはいるが、あまり意識していない。それでも白チームでは、点が入って同点になると、３人がスクラムを組んで、「俺達のチーム！」「同点だよ！」と言う。お互いの気持がわかり、力のバランスがとれて面白いのでトラブルがあまり起こらない。ルールを間違えると、強い口調で非難することもあるが「そんなに強く言わんでも」と言われてハッとした様子で、両方納得する。ＢとＣはルールが他の子程わかっていないため、つまらなくなると出てしまうが、また戻ってくる。Ｈがボールをうまくはずせず、緑に１点入り、４対３になる。Ｈはゴールキーパーを交代し、相手のゴール近くまで行きシュートし、４対４になる。保「１点取った方が勝ちね。」Ｙ「１５点になるまでやるよ」　強いボールが脚に当たっても、我慢して痛いといわない。開始から１時間２０分も続ける。

５歳児の遊び意識

ボール遊びはゲーム的なものに限らないが、４歳児も５歳児も次第にゲーム的な遊びに興味をもつようになる。前半期では、気の合った小人数でならやりとりを楽しむことができても、参加人数が増えると、ルールを守らなかったり、守らない子を怒るなどトラブルが増えて遊びが継続しない。しかし、表２にも示したように、保育者が遊びに入って具体的にトラブルの解決の仕方などを伝えることにより、ボールの取り合いになってどちらが先かわからない時などは、ジャンケンで決めるなどの提案も出てくるようになる。後半期

になると、ボールを操作する力が一段と向上し、チームの力が同じ程度であれば、互いの攻防もダイナミックで緊張感の溢れたものになる。このような場面では、激しくボールを奪い合ったりすることも、シュートしたり、当てるなどの自己追求の楽しさの一連の過程として意識される。上手でなくても力が互角であれば、「シュートできてうれしい」「ボールをもってビューンて走りまわったのがおもしろかった」など、それぞれに楽しさを感じている。事例１５は、緊張したゲームの攻防を楽しみながらも、勝敗にこだわらずにゲームを継続したいという質の高い遊び意識が随所にみられるようになっているることを示している。

表２　５歳児の遊び意識

	諸側面	子どもの姿
ボール遊びの遊び意識	身体面への現われ	・年長組のドッジボールに加わるが投げる、受ける、蹴る、つくなどの基本的な操作がかなり上手になる。 ・年長組のドッジボールに加わるがボールを遠くから上手に蹴る ・強いボールがあたっても痛いと言わない
	誘い・応答・発展など	・楽しんでいるのをみて参加する ・友達ではないが、上手な子を誘う ・点数表をつくる ・「同点だよ」「ボールをゴールに入れるんだ」などチームでスクラムを組んで励まし合う
	ルール役割分担など	・ドッジボールで当たっても出ない ・「もう1点で勝ちね」と言われて、「15点までやるんだよ」と言う ・キーパーを交代する ・ボールを取った子にしがみついてボールを奪おうとする ・ルールを守らない子に「ズルイ」と言ったり怒る
	トラブルの解決	・ボールの取り合いになって、はっきりしない時はジャンケンで決める

２、ボール遊びでの保育者の指導・援助

1）０～２歳児の遊び意識の芽生えの時期

この時期のボール遊びの事例は少なく、ボールと戯れる時期という認識に留まっていたが、ソフトバレーのボールやカラーボールなどのように感触がよくて、転がるスピードがあまり速くないボールであれば色々な関わりを楽しめることがわかる。２歳児では、怪獣やバスケットを準備したことで、穴やバスケットに入れたいという目的意識が明確になり、約１時間近くも挑戦する姿がみられた。こうした観察事例から、マーク・ジョンソンの述べるような認識や知覚の基礎となる図式のパターンのうち、「力」「道」「包含」（怪獣の穴に入れたボールが下から出てくる）、「バランス」などの陰喩投射される基本的な身体経験が豊富に含まれていることがわかった。このような感覚運動期にこそ必要な身体経験

と思われる。したがって、感触のよい、はずみも程よいボールを安心して使えるような環境の設定が望まれる。また、まだこの時期は、ボールと遊ぶ楽しさの経験が少ないので、保育者が積極的にボール遊びを楽しむモデルを示すことも大切である。

2）3歳児の集団的な遊び意識の始まりの時期

ボールを使って、先生や友達と転がし合ったり、蹴り合ったりなどを楽しむようになるこの時期には、上手にできないからやりたくないという子どもも出てくる。経験が少ない子どもは、どうしても抵抗感が強くなるので、保育者が丁寧に関わって、興味をもてるようにしたい。まだ子ども一人ひとりが、それぞれにボールとの関わりの楽しさを感じる時期なので、その気持を大切にするとともに、できるだけ楽しさのレパートリーを増やすようにしたい。3歳児ではあまりボールとの関わりがみられないが、0～2歳児と同様に大切な時期である。

3）4歳児の遊び意識定着の時期

4歳児前半では3歳児と同様に、ボールを操作する力を育てる援助が望まれる。後半になってゲームに興味をもつようになれば、自己を抑制したり、ルールを理解することが十分でなくてトラブルも多くまだまだゲームを楽しむまでには到らない。したがって、保育者が遊びの中に入って、自分達でトラブルを解決する方法を伝えたり、ルールのわからない子どもには丁寧に関わって理解できるようにすることが大切である。また、ゲームでは、ルールを理解するためにクラスみんなで取り組むというような事例もみられるが、遊びとして楽しむには小人数でなければ難しい。

4）5歳児の遊び意識深化の時期

5歳児のゲームにおいては、技能面だけでなく、ルールの理解や友達との関わりなど色々な面での育ちへの援助が求められるが、まず、例えばパスボールの事例にみられるように、子ども一人ひとりが求めている楽しさが追求できるようにすることが大切である。そのためには、チームの力が同じ程度になるようにしたり、シュートすることに楽しさがあれば、人数を多くしない、シュートしやすいコートづくりをするなどの配慮をしたい。つまり、ボール遊びの楽しさの核である、1つのボールをめぐって仲間と攻防を行う中での、自己挑戦、自己超越の楽しさが得られるようにしたい。またその際には、勝敗にこだわりすぎると遊びがこわれることが多くなるので、ルールを確認したり、遊びを楽しくするためにどのような振る舞いや態度が望まれるかを積極的に示し、徐々に子ども達だけで遊びを楽しむことができるようにルールを変えたり、工夫できるようにすることなど、どの集団的な遊びにも共通した指導が必要である。

＜おわりに＞

０～５歳児のボール遊びの観察および保育事例などを参考に、ボール遊びの遊び意識が加齢にともなってどのように変化するか、また事例に基づいて、そのような変化に対応してどのように指導援助したらよいかを追求した。その結果、

① ボール遊びには、マーク・ジョンソンの述べるような陰喩的投射の基本となる身体経験が多く含まれている。したがって、０～２歳の感覚運動期に感触のよい、程よいはずみのあるボールを準備し、保育者が積極的に、ボール遊びの楽しさを伝えてボールに対する興味を育てたい。

② ボール遊びの楽しさは、ボールを操作する力に左右されるので、経験の少ない幼児には保育者が遊び相手になるなどできるだけ丁寧に関わることが大切である。

③ ボールゲームの楽しさは、一人ひとり異なるが、次第に１つのボールをめぐっての攻防や技能の競い合いに収斂されるようになる。その過程にあっても、「シュートできた」「ボールを当てることができた」「もっと上手にやりたい」などの自己挑戦、自己超越の楽しさが追求される。ボール遊びの楽しさはこれだけではないが、子どもの育ちは、こうしたボール遊びに特有の楽しさの追求を可能にする保育への努力を通して達成されると考える。

などが明らかとなった。

＜引用・参考文献＞

1）村岡眞澄　幼児の身体に関わる遊びにおけるPlayfulnessの発達と保育者の援助のあり方：その（１）闘い遊びについて　日本保育学会　第４７回大会　研究論文集　PP. 700-701　１９９４

2）村岡眞澄　運動遊びにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助（１）鬼遊びの邉場面で　愛知教育大学　幼児教育研究　第４号　PP. 25-37　１９９５

3）村岡眞澄　運動遊びの発達　平井タカネ　河本洋子編　子どもの健康　理論編所収　P.92　三晃書房　１９９６

4）西村　誠　幼児期のボール当て投げ能力についての研究　日本保育学会　第４２回大会　研究論文集　PP. 550-551

5）森　司朗他　幼児のボールに対するBody Control の発達（１）～（４）日本保育学会　第４２回～４５回大会　研究論文集　１９８９～１９９２

6）蒲　真理子他　ボール運動能力の発達に関する一考察（１）―ボール転がし・投・捕およびシュート―　日本保育学会　第４１回大会　研究論文集　PP. 316-317　１９８８

7）大石裕子　幼児のボールを使った運動に関する一考察　日本保育学会　第４１回大会　研究論文集　PP. 586-587　１９８８

8）藤田公和　幼児のドッジボール投の動作発達について　日本保育学会　第４１回大会　研究論文集　PP. ９４－９５　１９９１

9）Jack K. Nelson et al. Gender Differences in Children's Throwing Performance: Biology and Environment Researrch Quarterly For Exercise and Sport Vol.57, No.4 PP.280-287 １９８６

10）飯田恵津子他　応答的保育に関する研究－園における物に対する遊びの発達－ボール遊びの発達的変化－

日本保育学会　第４２回大会　研究論文集　PP. 556-557　１９８９
11) 河邉貴子　子どもの遊びにおいてルールは自然発生するかー（２）ルール発生の条件をめぐる実証的考察　日本保育学会　第４４回大会　研究論文集　PP. 586-587　１９９１
12) 金光靖樹　Mark Johnson による想像力論の教育論的展開（１）—幼児教育における身体的経験の蓄積の意義とその方法論について—　アメリカ教育学会第５回大会発表　１９９３
13) マーク・ジョンソン　菅野、中村訳　心のなかの身体　紀伊国屋書店　１９９１
14) 才賀　敬　　渡辺弘純　　４歳児のあそび　労働旬報社　１９９４
15) 上野真理子　神田英雄　　５歳児のあそび　労働旬報社　１９９４